月蝕

夢野久作

★

鋼(はがね)のように澄みわたる大空のまん中で
月がすすり泣いている。
……けがらわしい地球の陰影(かげ)が
自分の顔にうつるとて………
それを大勢の人間から見られるとて…………
……身ぶるいして嫌がっている。

★

……しかし……

逃れられぬ暗い運命は…………

刻々に彼女に迫って来る。

大空のただ中に…………

★

……はじまった……

月蝕が……

★

彼女はいつとなく死相をあらわして来た。
水々しい生白い頬…………
……目に見えぬ髪毛を、長々と地平線まで引きはえた
………
それが冷たく……美しく……透きとおる……
コメカミのあたりから水気（すいき）が…………ヒッソリとしたたる。

★

彼女はもう…………
仕方がないとあきらめて
暗い…………醜い運命の手に…………
自分の美をまかせてしまうつもりらしい。

★

顋（あご）のあたりが
すこしばかり切り欠かれる。
…………黒い血がムルムルと湧く。
…………暗い腥（なまぐさ）いにおいが大空に流れ出す。

……それが一面に地平線まで拡がってゆく。
彼女を取巻く星の光がギラギラと冴えかえった。

★

彼女の瞼（まぶた）が一しきりふるえて
やがて力なく黝（くろ）ずんで来る。
鼻の横に黒い血の塊（かたまり）が盛り上る。
……深く斬込まれた刃（やいば）の蔭に
赤茶気た肉がヒクメク。

★

世界は暗くなった。
すべての生物は鉛のように重たく
針のように痛々しい心を
ジッと抱いて動かなくなった。

★

けれども暗い……鋼鉄よりもよく切れる円形の刃(やいば)は
彼女の青ざめた横頬を

なおもズンズンと斬り込んでゆく。
そこから溢れ出る暗い…………腥いにおいにすべては
溺れ込んでゆく。
…………山も…………海も…………森も…………家も
…………道路も…………
…………そこいらから見上げている人間たちも…………
…

★

その中にただ一つ残る白い光…………

彼女の額と鼻すじが
もうすこしで…………
黒い刃（やいば）の蔭に蔽われそうになった。

★

空一面の夥（おびただ）しい星が
小さな声で囁（ささや）き合って
又ヒッソリと静まった。

★

陰惨な最後の時…………
顔を蔽いつくす血の下に
観念して閉じていた白い瞼を
パッチリと彼女は見開いた。

★

案外に平気な顔で
下界の人々を流し眼に見まわした
ニッコリと笑った。

………ホホホホホホホ……

これはお芝居なのよ。

……大空の影と光りの……。

だから妾(わたし)は痛くも苦しくも………

……何ともないのよ………

そうしてもうじきおしまいになるのよ。

………でもさんホントになすったでしょう。

……あたし名優でしょう……

オホホホホ…………

★

ではサヨウナラ……

みなさんおやすみなさい。

……ホホホホホ…………

ホホホホホ……………

底本：「夢野久作全集3」ちくま文庫、筑摩書房
1992（平成4）年8月24日第1刷発行
底本の親本：「日本探偵小説全集　第十一篇　夢野久作集」改造社
1929（昭和4）年12月3日発行
入力：柴田卓治
校正：しず
2000年5月19日公開
2003年10月24日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫